

「僕がロンドンで一番おいしいステーキを食べたのは、先生の息子さんが焼いてくれたステーキですよ」。ロンドンに単身留学していた私の後輩の医師が、私に会うとよく言うのです。

彼のアパートに私の次男がヨーロッパ貧乏旅行中、転がりこんで、泊めてもらったとき、焼いたステーキです。

次男が中学生の頃ではないかと思うのですが、家族でレストランにでかけた折、食事中、突然、料理人に「この料理の隠し味はなに？」と訊きの行ったことがあります。私は吃驚です。「エ！エ！いつの間に、隠し味のことなど知ったの？」。とにかく、彼が料理に強い関心をもっていることが分かりました。

もし、彼が料理人になっていて、レストランでもやっていれば、私はレジ係ぐらいで、ひいきのお客さんに酒を注いで回ったり、談笑したりしながら、のんびりと楽しく暮らしていると思いますが、人生はなかなか思うように行かないものです。でも、料理は少し得意なのでしょうか。先日もスイスであった会に先輩と行ったとき、ホテルでなく山小屋に泊まり、料理を作っていたそうです。

大変個人的な隠し味の話が長くなってしまいましたが、世の中には隠し味的なことが多くあります。砂糖の甘みを引き立てる塩、印象派の絵画の光を引き立てるための影、女性の肌を輝かせるベースメイクなどなど。

いま日本学術会議が推薦した委員の数名が、政府によって任命されなかったことが、大学の自治と学問の自由を侵すものだと、盛んに議論されています。「政府の方針に異議を唱える委員」お断りでは、学術会議は政府の提灯持ち会議でしょう。政府は税金を10億円も使っているので組織の改革が必要だと問題をすり替えています。税金は政府に異議のある人からも徴収されています。10億円の税金を政府に都合の良いようにだけ使うとすれば、税金の無駄遣い？政府の方針に異議のある人からは税金を取らないという法律はどうでしょうか。

政府にたいする異議は、料理でいえば隠し味ではないでしょうか。反対意見の内容を十分考え、議論し、政策を作る方が味の良いものになると思いますが。